

中期朝鮮語複合語アクセント試論

辻野, 裕紀
九州大学大学院言語文化研究院言語環境学部門・言語教育学講座

<https://doi.org/10.15017/7153208>

出版情報：言語科学. 50, pp.39-46, 2015-03-31. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：

中期朝鮮語複合語アクセント試論

辻野 裕紀(つじの・ゆうき)

1. 緒言

周知の通り、中期朝鮮語¹(以下「中期語」とする)は、次の表のように、単一のアクセント句においてどこで音調が上がるかが弁別的な(ピッチアクセント言語)であった²:

【表 1】中期語の音調型³

1 モーラ名詞	2 モーラ名詞	3 モーラ名詞
L	LL	LLL
H	HO	HO○
	LH	LHO
		LLH

1 モーラ名詞	2 モーラ名詞	3 モーラ名詞
koc 《花》	mazam 《心》	sonskarak ⁴ 《手の指》
mom 《体》	kaci 《枝》	micikei 《虹》
	narah 《国》, torh 《石》	mjeniri 《嫁》, saram 《人》
		ka'jami 《蟻》

また、中期語において 2 つの要素が結合して複合語を形成する場合、その多くは各構成要素の固有の音調がそのまま現れる⁵:

¹ 「中期朝鮮語」とは、一般に 1443 年(諺文発明)から 1592 年(壬辰の役)までの朝鮮語を指すが(河野六郎 1955/1979 参照)、ここでは主に 15 世紀(ハングル創製以降)の朝鮮語について論ずる。中期語のアクセントの概論的な事項については、門脇誠一(1976,1985)、福井玲(1985,2013)、早田輝洋(1999)、趙義成(2002)、辻野裕紀(2014)などを参照。中期語における声調の変化を巨細に分析した召成 卍(1994)も重要である。

² 中期語の音の高低を「声調」と捉える向きもあるが、本稿では「アクセント」と見做して行論する。

³ 福井玲(1985:67)参照。なお、福井玲(1985)の「平」(=平声)は「L」,「去」(=去声)は「H」,□は○,語例のローマ字翻字は福井玲(2013:11)の方式に私(わたくし)に改めた。中期語では 1 つのアクセント句において、最初の H の後の音調はいわゆる句音調であり(律動規則によって自動的に音調が決まる)、音韻論的なものではない。表記法は論攷によって区々だが、本稿では以下、一貫してこのように、L で「低調」、H で「高調」、R で「上昇調」を表し、ローマ字翻字(transliteration)はすべて福井玲(2013:11)に依拠する。

⁴ なお、sonskarak は HLL というパターンもある。註 13 も参照のこと。

⁵ 허웅(1963)、김성균(1988,1999)参照。例は召成 卍(1999:80-81)より引用した。

【表 2】中期語の複合語の音調類型(音調変動が起きないもの)

音調	例
①L+L→LL	sur(L) + mit ^h (L) → surmit ^h (LL)
②L+H→LH	co(L) + psar(H) → copsar(LH)
③L+R→LR	mok(L) + sum(R) → moksum(LR)
④H+L→HL	'an(H) + pask(L) → 'anp ^h ask(HL)
⑤H+H→HH	naks(H) + pap(H) → nakspap(HH)
⑥H+R→HR	'ip(H) + kim(R) → 'ipkim(HR)
⑦R+L→RL	nui(R) + nuri(LH) → nuinuri(RLH)
⑧R+H→RH	ser(R) + tar(H) → sestar(RH)
⑨R+R→RR	moi(R) + koi(R) → moiskoi(RR)

しかし、中には次のように音調が変動するものも存在する⁶:

【表 3】中期語の複合語の音調類型(音調変動が起きるもの)

音調	例
(1)H+L→LL	kui(H) + mit ^h (L) → kumit ^h (LL)
(2)H+R→LR	skur(H) + per(R) → skusper(LR)
(3)R+L→LL	moi(R) + 'entek(LL) → mois'entek(LLL)
(4)R+R→LR	kam-(R) + tor-(R) → kamstor-(LR)

では、なぜ(1)H+L, (2)H+R, (3)R+L, (4)R+Rという組合せの場合に音調の変動が起きるのだろうか。

これらの共通点として注目されるのは、すべて先行要素が H か R, すなわち高調で終わる形態素であり、かつ後行要素が L か R, すなわち低調で始まる形態素であるという点である。つまり、R を L と H の組合せと見做せば、これらはすべて HL という音調連続が含まれているという点において共通している。

こうした音調の変動について、김성균(1988,1999)は、通時的な視座からの説明を企図している。すなわち、中期語以前の時期の朝鮮語には、HL を避ける制約、つまり*HL という制約があり、中期語で一瞥すると H+L→LL のように見える語は、この制約によって中期語以前に生じた音調がそのまま残存していると見るわけである⁷。一方で、H+L→HL となっている語は、語彙化(lexicalization)が不十分であるために、中期語の話

⁶ 김성균(1999:81-82)参照。

⁷ なお、「HL を避ける制約があった」という見解は김성균(1988,1999)が嚆矢ではなく、夙に Lee(1978)も提示している仮説だが、Lee(1978)は中期語自体にかかる制約があったと見ているのに対し、김성균(1988,1999)は中期語ではなくそれ以前の時期の制約と見做している点が大きく異なる。つまり、Lee(1978)が提示している制約はどこまでも共時的なものだが、김성균(1988,1999)は通時的な視座から説明を試みているわけである。また、김성균(2009:23)は、朝鮮語(中部地域語)の韻素体系の変遷を「非弁別的な語末アクセント>音高アクセント(I)>形態素声調>音高アクセント(II)>アクセントの非弁別化および長短の弁別力獲得>長短の非弁別化」のように考えており、これに従えば、*HL たる制約を有した、中期語よりも一段階古い朝鮮語は、*HL, *HR, *RL, *RR といったパターンを缺いたアクセント言語であったということである。

者が分析して頭の中で再び作り出したものと目す。

しかし、かかる音調変動を共時的に解釈することはできないだろうか。現在でも声の高さが弁別性を有する慶尚道方言⁸や、日本語諸方言などの通言語的視座から見る限り、複合語において各々のアクセントがそのまま現出すると考えるのは抑々自然ではない。本稿では共時アクセント論的立場から中期語の複合語のアクセントを捉え直し、中期語の複合語アクセント規則の定立を試図したい。

2. 中期朝鮮語のアクセント体系

中期語のアクセント体系をどのように考えるかにはいくつかの立場があるが、茲では「[´」を上げ核(raising kernel)⁹、「○」を任意のモーラとして、中期語が次のようなアクセント体系を成していたと見做す：

【表 4】中期語のアクセント体系

1 モーラ名詞	2 モーラ名詞	3 モーラ名詞
○[○○[○○○[
○	○[○	○○[○
	○○	○[○○
		○○○

このアクセント体系は、夙に福井玲(1985)が「B 案」として提示した、去声で始まる語幹を無標(unmarked)とし、それ以外の場合には、語幹から連続する平声のうちの最後のものに「低(高)核」を与える解釈とほぼ同一のものである。去声で始まるものを無標とする点では早田輝洋(1999)の解釈とも類似しているが、上声の扱いやアクセントそのものの捉え方において立場を異にする¹⁰。

本稿では、この音韻解釈に基づき、中期語の複合語アクセント規則を考えてみたい。

3. 中期朝鮮語の複合語アクセント規則

前述のように、中期語には、(1)H+L→LL, (2)H+R→LR の如き音調の変動が存在するのであった。本稿では、かかる変動を謂わば「HL を防遏する通時的規則の形骸」ではなく、「複合語のアクセントを統べる共時的規則の存在の徴憑」と見たい。問題となる音調変動を【表 4】に従い音韻表示で示すと次のようになる(菅野

⁸ 慶尚道方言(就中、大邱方言)の複合語アクセントについては、辻野裕紀(2008:57-67)を参照されたい。なお、慶尚道方言はアクセント句内部においてどこで音調が下がるかが示差的である点で中期語とは大きく異なり、この点では寧ろ日本語東京方言などと類似している。

⁹ しばしば誤解されるが、「上げ核(raising kernel)」と「昇り核(ascending kernel)」は異なるものである。上げ核とは「核が置かれた拍の次の拍を上げる力」、昇り核とは「核が置かれた拍から上がる力」である。中井幸比古(2003:86)参照。上げ核は、服部四郎(1973)が日本語山梨県奈良田方言の音調分析に適用した「低(高)核」と同質のものである。

¹⁰ 早田輝洋(1999)は、上声を語頭アクセントとし、また、アクセントの担い手が(音節やモーラではなく)音節境界であるという立場に立っている。なお、中期語の上声を語頭アクセントと見做した場合に生じる問題点については、福井玲(1985,2000,2013)を参照。上声は第 1 音節以外にも出現し、上声を語頭アクセントとする音韻解釈には点頭し得ない。

裕臣(1997)に倣い、1音節2モーラには下線を付す)¹¹：

- (1) $O+O[\rightarrow OO[$ (H+L→LL)
(2) $O+O[\underline{O} \rightarrow O[\underline{O}$ (H+R→LR)

そして、これらから、次のような規則を導出しよう：

一方の要素のみが有アクセントの場合は、そのアクセントがそのまま維持される

では、他のパターンはどうだろうか。従前の研覈では単に各構成要素の音調がそのまま連なっていると見做されてきた、L+L→LL, L+H→LH, L+R→LR, H+H→HH, R+H→RHのようなパターンも(1), (2)と同様に、音韻表示をしてみると、次のようになる¹²：

- ① $O[+O[\rightarrow OO[$ (L+L→LL)
② $O[+O \rightarrow O[O$ (L+H→LH)
③ $O[+O[\underline{O} \rightarrow O[\underline{O}$ (L+R→LR)
⑤ $O+O \rightarrow OO$ (H+H→HH)
⑧ $O[\underline{O}+O \rightarrow O[\underline{O}$ (R+H→RH)

これらを観察すると、②、⑧のように一方の要素のみが有アクセントの場合は、やはり上で見た(1), (2)のように有アクセントのアクセントがそのまま維持され、①、③のように先行要素も後行要素も共に有アクセントの場合は後行要素のアクセントのみが維持されることが分かる。さらに、⑤のように、先行要素も後行要素も共に無アクセントの場合は複合語も無アクセントとなる。したがって、中期語における〈複合語アクセント規則〉(Compound Accent Rule: CAR)は次のようにまとめうる：

中期語の複合語アクセント規則(CAR)

- | |
|---|
| <p>a. 先行要素も後行要素も共に有アクセントの場合は、後行要素のアクセントのみが維持される
b. 先行要素も後行要素も共に無アクセントの場合は、複合語も無アクセントになる
c. 一方の要素のみが有アクセントの場合は、そのアクセントがそのまま維持される</p> |
|---|

このように捉えれば、一見例外的に見える H+L→LL, H+R→LR, R+L→LL, R+R→LR といった規則も例外ではなくなり、あらゆる組合せが複合語アクセント規則の下に一元的、統一的に把握することができる。次の表で再度確認してみよう：

¹¹ (1), (2)の番号は各々【表3】に対応する。

¹² ①, ②, ③, ⑤, ⑧の番号は各々【表2】に対応する。

【表5】中期語の複合語アクセント

音調	音韻表示	適用される規則
L+L→LL	○[+○]→○○[a 規則
L+H→LH	○[+○→○[○	c 規則
L+R→LR	○[+○]○→○○]○	a 規則
H+L→LL	○+○[→○○[c 規則
H+H→HH	○+○→○○	b 規則
H+R→LR	○+○]○→○○]○	c 規則
R+L→LL	○]○+○[→○○[a 規則
R+H→RH	○]○+○→○]○○	c 規則
R+R→LR	○]○+○]○→○○]○	a 規則

一方、従前の研覈においてあまり問題とされなかった、H+L→HL, H+R→HR, R+L→RL, R+R→RRの如きタイプは、複合語アクセント規則が適用されていない〈名詞連続〉¹³と見做す¹⁴。

また、この複合語アクセント規則は、〈用言複合体〉¹⁵において語幹と接尾辞(先語末語尾)、語尾(語末語尾)が結合する際の音調についても説明しうる:

【表6】中期語の用言複合体のアクセント¹⁶

例	音韻表示	適用される規則
cap-ko (LH)	○[+○→○[○	c 規則
cap-'imje (LH○)	○[+○○→○[○○	c 規則
cap-'isi- (LLH-)	○[+○]○→○○]○	a 規則
cap-te- (LH-)	○[+○→○[○	c 規則
cap-nΛ- (LL-)	○[+○[→○○[a 規則
cap-ke- (LL-)	○[+○[→○○[a 規則

¹³ 「名詞連続」という術語は、辻野裕紀(2008)による。辻野裕紀(2008:57)は「1つのアクセントのみを有する(あるいは無アクセントの)複合名詞、すなわち1つのアクセント句にまとまっている複合名詞」を〈名詞結合〉、「各構成要素のアクセントがすべて表層に現れ、2つ以上のアクセント句からなる複合名詞」を〈名詞連続〉と呼んでいる。日本語学で中井幸比古(2012:147-148)の言う(2語連続)に相当する。また、趙義成(2002:60-61)は、sons-karak (HLL)のように、2つの形態がアクセント的にそれぞれ独立している場合、両者の間に「強いアクセント的境界」があると見做している。

¹⁴ 〈名詞連続〉と〈名詞結合〉の差異は、プロソディックなレベルのみならず、場合によっては、分節音のレベルにも反映されることが間々ある。例えば、《足の指》を意味する中期語には、pars-karak と pas-karak があり、前者は HLL (名詞連続)、後者は LLL (名詞結合) で現れるが、前者では先行要素 par の語末子音 r がそのまま維持されているのに対し、後者では脱落している。また、名詞連続の中には、「語源的標記法」(河野六郎 1951/1979:444)のものが含まれている可能性があり、表記(傍点)と当時の実際の発音が吻合しないものもあると思われる。

¹⁵ 「用言複合体」という概念については、河野六郎(1971/1979)、亀井孝他編著(1996:1371-1373)などを参照。

¹⁶ 例は福井玲(2013:110)による。

4. モーラの問題

ところで、問題となりうるのは、 $R+L \rightarrow LL$, $R+R \rightarrow LR$ の解釈である(【表5】参照)。これらは、複合語アクセント規則の適用前と適用後でモーラ数が変わっているものである。これについては、次の2通りの見解がありうるだろう:

- (α) $R+L \rightarrow LL$, $R+R \rightarrow LR$ の二重下線のLは、傍点表記では無点(平声)で表されるが、実際には2モーラ分の長さで発音されていた
- (β) 母音を削除する規則を別途に設ける

α案に関しては、福井玲(2000:17-18)も指摘するように、中期語においては、長さを表記するための専用の表記法が存在せず、音韻論的に2音節分にあたる長母音を短母音と区別して書かない場合があったと考えられることがその傍証となりうる。表記上は短母音、すなわち平声や去声として書かれていても、実際は長母音であった例も存在した可能性がある。例えば、수울 su'ur(LL) ~ 술 sur(L)《酒》, 가 ka(H) ~ 가야 ka'a(HH)《行って》のように表記が混在しているものがあり、술 sur(L), 가 ka(H)のような語は、表記上は短母音のように書かれていても、実際には長母音で発音されていたかもしれない。もし、例えば仮에나 nasnas($R+R \rightarrow LR$)の第1音節が長く発音されていたとしても、表記は에나 nasnas(無点, 2点)と書くほかない。

β案に関しては、中期語の所謂「流動的上声」¹⁷⁾の問題も併せて考えなければならない。例えば、남다 namta《残る》は, 남고 namko(RH)のように子音語尾が結合すると語幹は上声で現れ, नाम nama(LH)のように母音語尾が結合すると語幹は平声で現れるが、後者のパターンでは結合前と結合後とでモーラ数が変わる。結合前は合計3モーラだが、結合後は2モーラとなる。これを音韻表示すると、次のようになる:

$$\underline{O}[\underline{O} + O \rightarrow O]O \quad (\text{nam}(R) + 'a(H) \rightarrow \text{nama}(LH))$$

管窺の限り、多くのアクセント論者は、活用によってモーラ数が変わることについてあまり注視していないように見える。所謂「語基論」的な立場に立脚する場合には、nam-($R=LH$)とnama-(LH)を同一形態素の異形態(前者は第I語基、後者は第III語基)の如く見做すため、理論上問題にならないものと思われる¹⁸⁾。しかし、いずれにせよ、 $R+L \rightarrow LL$, $R+R \rightarrow LR$ に関しては、そのように考えることもできず、1モーラの母音を削除する規則をどこかに設けなければならないこととなる。

5. 結語

以上、共時アクセント論的視座から中期語の複合語のアクセントについて簡単に攷察を試みた。茲に本稿で論じてきたことを繰り返すことはしない。言語事実についての攷察が十分ではなく、本稿で開陳した鄙見は仮説の域を出るものではない。題目を「試論」とした所以である。本稿の素描を「敲き台」としたさらなる議論が為されんことを庶幾する。

¹⁷⁾ 김완진(1973;1989)参照.

¹⁸⁾ 菅野裕臣(1997), 趙義成(2002)など.

参考文献

(1)日本語文献

- 門脇誠一(1976)「中期朝鮮語における声調交替について」,『朝鮮学報』79, 朝鮮学会.
- 門脇誠一(1985)「中期朝鮮語の声調の特徴 —特に15世紀末の文献を中心に—」,『朝鮮学報』116, 朝鮮学会.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1996)『言語学大辞典 第6巻 術語編』,三省堂.
- 菅野裕臣(1997)「朝鮮語の語基について」, 国立国語研究所『日本語と朝鮮語 下巻 研究論文編』, くろしお出版.
- 河野六郎(1951)「諺文古文献の声点に就いて」,『朝鮮学報』1, 朝鮮学会.
- 河野六郎(1955)「朝鮮語」, 市河三喜・服部四郎編『世界言語概説 下巻』, 研究社.
- 河野六郎(1971)「朝鮮語の膠着性に就いて」, 東京教育大学言語学研究会編『言語学論叢』11, 東京教育大学言語学研究会.
- 河野六郎(1979)『河野六郎著作集 1』, 平凡社.
- 趙義成(2002)「中期朝鮮語アクセント小攷」, 朝鮮語研究会編『朝鮮語研究 1』, くろしお出版.
- 辻野裕紀(2008)「韓国語大邱方言における名詞のアクセント体系」,『朝鮮学報』209, 朝鮮学会.
- 辻野裕紀(2014)「アクセント体系の〈計量的非対称性〉をめぐって —中期朝鮮語と朝鮮語大邱方言を対象に—」,『言語科学』49, 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会.
- 中井幸比古(2003)「アクセントの変遷」, 上野善道編『朝倉日本語講座 3 音声・音韻』, 北原保雄監修, 朝倉書店.
- 中井幸比古(2012)「複合語のアクセント(1)」, 松森晶子・新田哲夫・木部暢子・中井幸比古編著『日本語アクセント入門』, 三省堂.
- 服部四郎(1973)「アクセント素とは何か?そしてその弁別的特徴とは?」,『言語の科学』4, 東京言語研究所.
- 早田輝洋(1999)『音調のタイポロジー』, 大修館書店.
- 福井玲(1985)「中期朝鮮語のアクセント体系について」,『東京大学言語学論集'85』, 東京大学文学部言語学研究室.
- 福井玲(2000)「韓国語諸方言のアクセント体系について」, 福井玲編『韓国語アクセント論叢』, 東京大学大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設東洋諸民族言語文化部門.
- 福井玲(2013)『韓国語音韻史の探究』, 三省堂.

(2)朝鮮語文献

- 김성규(1988)「성조의 재구방법」,『국어국문학』100, 국어국문학회.
- 김성규(1994)『중세국어의 성조 변화에 대한 연구』, 서울대학교 대학원 박사학위논문.
- 김성규(1999)「중세국어 합성어의 성조」, 성백인 교수 정년퇴임 기념논문집 간행위원회 편『언어의 역사』, 태학사.
- 김성규(2009)「15세기 한국어 성조의 성격에 대하여」,『국어학』56, 국어학회.
- 김완진(1973;1989)『중세국어성조의 연구』, 탑출판사.

허웅(1963)『중세국어연구』, 정음사.

(3)英語文献

Lee, Sang Oak(1978) *Middle Korean Tonology*, Doctoral dissertation University of Illinois at Urbana.